

親鸞に於ける同朋主義

松 永 大 覚

一

浄土真宗の教法は何人にも自ら師を以て居ることは許されないのである。即ち師を以て居らないことは親鸞の人徳ではなくて真宗の法徳である、一切の人々を救済せんとする仏の願心は常に一切の人々を代表して聞き、又常に一切の人々の中に自己自身を見出して聞ゆるものである。それには無辺の煩惱に自覚したものの、態度があるのである。歎異鈔第六章の

「親鸞は弟子一人ももたずそふろふ。」

そのゆえは。わがはからいにて、ひとに念仏をまうさせさふらはゞこそ、弟子にてもさふらはめ。ひとへに弥陀の御もよほしにあづかりて念仏まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。」

との御言葉は親鸞は常に偉大な尊敬の念を払つて居つた梅の明恵上人が「われは師をもうけたし、弟子は、ほしからず」と云はれたのと面白い対象である。この自力聖道門の大徳と他力浄土教の大成者とが全く同年（高倉天皇の承安

三年)に生れ、その宗教上の立場は全く対蹠的でありながら、この師弟の問題については全く同一の態度を生涯もちつづけられたのは誠に興味深いことである。而かもこの二大徳を心から慕つて弟子の礼をとるものが多かつたことを思うと現代の我々は深く教えられるところがあるのである、

歴史上から云えば親鸞には多くの弟子があるのである。即ち親鸞門侶交名牒に依れば東関東に於ける弟子は三十六人即ち常陸に十九人、下野に五人、下総に三人、奥州に六人、武蔵に一人、趣後に一人、地方不明なるもの一人である。これ等の弟子達は親鸞が師法然上人に対して懐かれた感情を以て親鸞を心から尊敬したのである。ここに一例を挙げるならば弟子蓮位房が夢の告げに、親鸞を弥陀の化身であると感得したと云う伝記等で弟子達はいかに親鸞を敬慕したかと云うことが解るのである。而るに親鸞自身はこれらの弟子達をわが弟子として取り扱はれなかつたのである、生涯親鸞は「同一に念仏して別の道なきが故に四海のうち皆兄弟なり」と云う支那の曇鸞大師の御言葉を頂き通されたのである。

二

而らば何故親鸞は弟子一人ももたずと云うのかと云へば全く親鸞の他力信仰が斯く云はしめたのである。念仏は他力廻向の念仏であつて弥陀の御もよほしがなかつたならば一声の念仏も現はれる筈がないからである。「如来よりたまはりたる信心」それは親鸞の全生命である。而るに種々の学問技芸の知識は先覚者より後覚者へと伝はるのであるから、そこに当然師弟の關係があつて我が弟子ひとの弟子と云う別も出来てくる訳である、又仏教に於てもその学道の本として修行を要する宗旨にあつてはこの師弟關係は特に深きものがあるうと推察するのであるが而し偏へに弥陀の

御もよほしにあづかつて念仏する浄上真宗はむしろ反省さるべきものである、人の師となるには何ものか持たなければ、而るに親鸞は何ものも持たない、否持とうとすることさえ慚愧されたのである。何ものも持たない親鸞は、そこにかえつて常に大悲の本願に向つて信順してゆかれたのである。親鸞に弟子一人も見当らない所に懐かしい広々とした同行同明の世界が開け、共に如来の恩徳を感謝する境地が開かれるのである。果して我々の如き煩惱具足の凡夫が念仏を称えるものであろうか、本願の世界には自ら称うると云うことはないのであつて称えしめらるるのである。全く弥陀の御もよほしと云つても外に存在して催させらるるのではなくて、念仏称えんと思いたつ心となつて下さるのである。而し親鸞ほど師匠を尊敬し敬慕せられた方はなかつたのである。即ち「たとひ地獄たりとも故聖人のわたせたまふところへゆかんとなり」と仰せられている。又法友聖覚法師等に対しても謙虚に師事せられたことを思い浮べても親鸞が万人を師として仰がれた敬虔な態度を伺うことが出来るのである。

当時は念仏教団と云うものがあつて、そこにおのづから師匠があつて集まつて来る人は弟子と決めて居つたのである。而してお聖教には対して署名するのである。署名してもらうとその人の弟子になつて居るのである。或は又御本尊御名号を書いて授けるといふこともあつたのである。而るに団体から離れて外の団体へ移る時には名号も聖教も取り返すと云つて争論したものである。而して師の恩を知らないから地獄へ墮ちると云う様なことさえ云つたのである。誠に専修念仏と云う尊いことで集りながら、その集りと集りの間に争いを起し、わが弟子、ひとの弟子と云うことは親鸞は悲しく思はれたことと推察するのである。即ち専修念仏の法には、弟子と云うものはないのであると云うことを明らかにせられたのである。

蓮如上人は御文章一帳目第一通に

「故聖人のおほせには親鸞は弟子一人ももたずとこそおほせられ候ひつれ、そのゆへは如来の教法を十方衆生にと

ききかしむるときはただ如来の御代官をまうしつるばかりなり、さらに親鸞めづらしき法をもひろめず、如来の教法をわれも信じ、ひとにもをしへきかしむるばかりなり、そのほかにはなにをしへて弟子といはんぞとおほせられつるなり、さればとて同行なるべきものなり、これによりて聖人は御同朋、御同行とこそかしづきておほせられけり。」これ全く他力より授けらるる信心であるから、如来こそ師であつて我々凡夫間で師匠とか、弟子とか云うことは出来ないのである。而るに教団の事実を伺うと誠に悲しいことである。伝道者は伝道者で自分の力で人を導いて信を得しめたように考え、又求道者は求道者で他の人では満足を与えてくれなかつたが、ただこの人の御導きで信仰に入ることが出来たと考えたりして常に法然上人と親鸞との例を取つて来るのである、所謂「善知識たのみ」の異義異安心に落入るのである。

歎異鈔第二章に

「弥陀の本願まことにおはしまさば釈尊の説教虚言なるべからず、仏説まことにおはなしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず、善導の御釈まことならば法然のおほせそらごとならんや、法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむねまたもてむなしかるべからずさふらふか」と、

法は独り弘まるものではなく、必ず人によつて弘まるのであるが、而し求道者を信に列らす力は全く如来のお慈悲の力によるのであつて、決して伝道者の力ではないのである。全く「ひとへに弥陀の御もよほしにあづかりて念仏まうしさらふ」であつて、我が弟子、ひとの弟子どころではないのである。

世の中に於ける集合離散は凡て因縁の理法によるものである。而しこの因縁がいかにやうであろうとも如来のお慈悲に關係はないのである。そこで今専修念仏の教団とは如何なるものであらうかを考察すると自力の宗旨の教団は道場が中心になるのである。たとえば禅宗の宗門の理想は道場でなければならぬ。而してそこに師家があつて雲水が集

まつて来るのである。在家と云つても結局は寺へ集つて座ることである。故に道場として宗門があり、教団があるのである。又その外に教団と云うのは一つの組合であると云う考え方もあるのである。「わが弟子ひとりの弟子」と云う場合は宗門、教団は組合と云うことになつてくると思うのである。

されば真宗教団は如何なるものであらうか組合であらうか道場であらうか、歎異鈔第六章を伺うと、人の業縁と云うものが特に考えられるのであつて、真宗教団は業縁と法縁との結合である。人にはそれ／＼深い業縁があると思ふのである。その人／＼の業縁が機となつて法縁となるのである。人の業縁と云うものには性格とか、氣質とか云うものが関係するのである。即ちその縁あつて同じ様な気持ちの人が集り、同じ様な性格の人が出てくるのである。たとえば子供を死なしたと云う同情のしあいによつて互に話が解ると云うようなことがある。眞実の縁と云うものは法によつて知らしめられるものであるが而し結びつけられた縁と云うものが人縁であるが爲に又離るゝこともあればつくこともあるのである。而し法縁と云うものは一度結びつけられた限り永遠に離れると云うことはないのである。而し人の縁と云うものは何かの機会いかに親しいものでも疏くなると云うこともある。故に我が身につれて念仏申す人は我が身に縁があり、他の人につれて念仏を申す人はその人に縁があるのである。その縁は人々の間に於ける業縁と云うものである。その縁にはつくべき時も離るべき時もあるのである。即ち人間の縁と云うものは而らしむる所である。而るにその縁と云うものを忘れて師匠に背き、人につれて念仏すれば、往生不定と云うことは、それは以ての外のことであり、全く不可説のことである。これ即ち法縁を人縁に私するものと云はなければならぬ。

三

仏の真実を受け取つた人であるならばおのづから仏恩を知ると同時に師の恩も知ることが出来るのである。故に數異鈔第六章に

「自然のことわりにあひかなはゞ仏恩をも知り、また師恩をもしるべきなりと云云。」と。

又未燈鈔に

「自然といふは、おのづからといふ、行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるゆえに、法爾といふ。……自然というは、もとよりしからしむることばなり、弥陀仏のちかひのもとより行者の計らひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて、むかへんとはからせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんとも思はぬを、自然とはまうすぞとききて候」と。

自然と云うことは放埒、自暴自棄の意味ではなくて、如来の願力に乗托したことを云うのである。故にその自然の道理に「かなふ」とは信仰を得ることを云つたものである。信仰を得れば、いよく自己の価値の如何なるかを知り、御恩の尊さも知らるゝのである。

蓋し親鸞は凡てを他力と視て、また因縁の然らしむる所とせらるるのである。これ即ち人縁は法縁に帰していよいよ深しとでも云うべきものであろう。まことに縁と云うものは有難いものである。語るにしても、聞くにしても、この縁と云うものほど有難いものはないのである。つくべき縁があれば伴い、離るべき縁あれば離れると云うそのことを最後に云つて仏恩をも知り、また師恩をも知る様になるのである。親鸞ほど仏恩を知り師恩を感ぜられた方はな

かつたであらう。

故に正像末和讃に

「如来大悲ノ恩徳ハ 身ヲ粉ニシテモ報スベシ

師主知識ノ恩徳モ ホネヲクダキテモ謝スベシ」と。

(本学教授 宗教)